

枠組みだけをつくりあげようとしてもそれは不毛なことであり、本書に展開されたような手堅い事例研究をつみ重ねていくこと、即ち「沖縄の地でじっくり考え」ていくことが最も大切なことなのではあるが、津波沖縄〈民俗学〉の見通しをもう少し詳しく聞きたいと思うのは私だけではあるまい。また、周辺地域の事例報告を、今回は〈付録〉として慎重に位置づけているのだが、「はしがき」には、著者が沖縄民俗研究に周辺諸地域との〈比較〉という視点を導入しようとする意図していることが述べられている。だとすれば、著者の沖縄社会〈民俗学〉にとって〈比較〉の意義とは何なのか、あるいは沖縄本島地域と先島地域との比較についてはどう考えているのか、ぜひとも知りたいところである。

この『比較民俗研究』2号が刊行される頃、沖縄において日本民俗学会第42回年会在開催されることになっている。そこでのシンポジウムのテーマは「沖縄民俗研究の展望—東アジアの中の沖縄—」である。沖縄〈民俗学〉について、〈比較〉について、著者の発言に注目したい。

(1990年6月 第一書房 南島文化叢書11)

渡邊欣雄 編著

『祖先祭祀』

—環中国海の民俗と文化—第三卷

辻 雄二*

本書は副題にあるように「環中国海の民俗と文化」を探るため、比較研究の試みとして「中国海をめぐる各地域、中国大陸、朝鮮半島、九州、奄美、沖縄、宮古、八重山、台湾、フィリピン、東南アジア」を学際的視点から切り込もうとするものである。その地域における民俗文化の独自性を浮かびあがらせることを目的としている。

本書の構成は、まず編者である渡邊が序論として本書の統一テーマである「祖先祭祀」について

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

触れつつ、順に「本書企画の意図」、「比較対象地域限定の意図」「本書構成の意図」について述べている。以下、五章にわたり十六編の論考を取っている。

第一章 祭祀組織

第一節 韓国の祭祀と社会組織 (朝倉敏夫)

第二節 沖縄の祖先祭祀—祀る者と祀られる者 (笠原政治)

第三節 台湾漢人社会の祖先祭祀—家族と宗教の祭祀をめぐる (植野弘子)

第二章 位牌祭祀

第一節 韓国の位牌祭祀 (朝倉敏夫)

第二節 沖縄の位牌祭祀 (喜山朝彦)

第三節 台湾の位牌祭祀 (堀江俊一)

第三章 葬制と墳墓

第一節 濟州島の葬送儀礼と親族組織 (崔在錫・津波高志訳)

第二節 沖縄の葬送儀礼 (名嘉真宜勝)

第三節 台湾漢人社会の墓制 (平敷令治)

第四章 供養儀礼

第一節 韓国の喪礼について (李光奎・黄達起訳)

第二節 沖縄における墓供養—供物を中心として (藤井正雄)

第三節 清明日の墓参について (窪徳忠)

第四節 墓・祠堂・そして家—香港新界における祖先祭祀と宗族 (瀬川昌久)

第五章 靈魂観と他界観

第一節 韓国における他界観について (竹田旦)

第二節 沖縄の靈魂観と他界観 (赤嶺政信)

第三節 台湾における死者の靈魂と骨 (植松明石)

あとがき

藤井正雄の「沖縄における墓供養—供物を中心として—」(竹中信常博士頌寿記念論文集刊行委員会編『宗教文化の諸相』、一九八四年、山喜房刊)と竹田旦の「韓国における他界観について」(元興寺文化財研究所編『東アジアにおける民俗と宗

教』、一九八一年、吉川弘文館刊)の二論文と崔在錫、李光奎両氏の翻訳論文二編が転載論文であり、基本的に書きおろし論文が多数を占める。従ってそれぞれが比較研究という問題をどの程度意識したものであるか計り得ないが、「祖先祭祀」という共通の基盤に支えられ、まとまりをみせているかは編者の目指すところといえよう。

渡邊の比較研究における立場は異民族文化理解にあたっては、まず「比較民俗学」も「日本民俗学」も捨ててみよ(『沖縄の社会組織と世界観』、一九八五年、新泉社。五二六一五二七頁)、という主張からも理解できる。比較研究のための民俗学ではなく、たとえ日本民俗学にとって無益な結果になろうとも、まず異文化理解の視点から異郷の生活を十分に理解すべきであるという立場である。一見非常に潔く、これからの「比較民俗学」の可能性を考えるうえで注目すべき主張である。しかし他方、比較のための「民俗学」が成立する可能性がないかという点、一概にはそうも言えない。この問題は民俗学者にとって外国調査がどのような意味を持つのかといったことと併せて、今後の「比較民俗学」研究が展開されるなかで解決されていかなければならない。

従って先にも簡単に述べたが、本書は共通の基盤に立ち、それぞれの異郷を別な視点で捉える形で「環中国海民俗文化」の比較研究を目指したものである。

次に構成をみても明らかなように、本書で取り上げられた地域は「沖縄」、「韓国」、「台湾」の三地域である。これは「刊行にあたって」と「比較対象地域限定の意図」で繰り返し説かれているように「沖縄を交差点とする中国海の諸文化の交流の歴史を探ることは、ひとり日本の文化・歴史だけでなく、アジアの文化をひもとく大きな手掛かりとなると考えられます。」という考えからである。確かに柳田民俗学以降、沖縄研究の狙いは日本文化の古層を探るという方向で行われてきた一面は認められよう。日本本土と風土も気候も異なる沖縄本島を中心とした琉球諸島は、その歴史的、地域的条件のなかで強い独自性を育み、日本文化

とは別な道を歩み続けてきた。地域研究の一つであるには違いないが、質的にもその空間的にも十分な深みを感じさせてくれる文化であると評者は考える。今日までの沖縄研究における祖先祭祀の成果を活かし、その「大交易時代」の文化交流を寄りどころに比較の俎上に置いた。評者が韓国、台湾での研究に対しあまりに浅学なために、失礼ながら各論文をそれぞれの地域での研究史に位置づけることはできないが、比較研究の可能性を沖縄を中心に据えるなかで考え、その先に「環中国海」という広い文化圏を想定したということは大いに評価されよう。しかしながら本書では「技術的な理由」として除かれた中国本土、日本本土がなおさら興味深く思われるのは自然であろう。日本本土については柳田や有賀喜左衛門はいうに及ばず、多くの有力な業績が残されている。中国本土についてはその調査、研究が簡単では無いにせよ、その多様な民族性、地域性をも踏まえた業績が出されつつある。本書の主題である「祖先祭祀」の問題が、今後広く東アジア文化圏の中で議論されることを予感させる。その一歩としての試みとしてみると、この書のもつ意義は大きいといえるのではないだろうか。

本来ならば個々の論文について慎重に読みすすめるべきであるが、評者の力量が不足なことで、問題が多岐にわたるため以下、各章を簡単に概観する程度にとどめたい。

第一章ではそれぞれの地域で祖先祭祀をいとなむ祭祀組織に注目し、その課題となる問題点を明らかにすることを目的としている。韓国の紹介は「家」から順に「堂内親」、「門中」、「本貫と姓」と組織の拡大していくうちにまとめられている。沖縄の場合もそれと変わらず、一般的なモデルについての論が展開されている。しかし台湾の場合は漢人社会という限定した社会に絞り込んだにもかかわらず、その内実が複雑かつ重層的であるために一般的なモデルを抽出するのは困難であることを認識させる。第二章では沖縄の社会関係に厳格な規制を与え続ける位牌祭祀の問題を中心に、他地域との比較検討を可能にする中で形式主

義的な面や逆に偏重主義的な面を相対化しようと探っている。第三章と第四章は本書にも述べられているようにややまとまりに欠ける。しかし全体の流れ、章の構成からみると位牌祭祀と第五章の「靈魂観と他界観」をつなぐテーマとしては適していると考えられる。注目したいのは第五章の「靈魂観と他界観」である。従来祖先祭祀の研究はその祭祀組織や社会組織面からのアプローチが多く、常に生きるもの、子孫の眼から行われてきた。ここでは祖先観を靈魂観の中に解き放つことによってあらためて祖先の存在を相対視することを目指している。

最後に本書を通読し、全体に共通する問題として考えられる点を述べ、まとめて代えたい。個々の民俗要素が、それぞれの国の歴史の変遷の中でどのように位置づけられるのか。この視点が欠如しては単なる文化要素の羅列に終わってしまう可能性を残すことになる。鈴木満男の「盆にくる霊—台湾の中元節を手がかりとした比較民俗学的試論」(『マレピトの構造』、一九七四年、三一書房刊)は台湾と日本のそれを取り上げ、その異質性に注目し、その差異がどのように生じてきたのかを探るやり方で論を展開する。鈴木は注目すべき点は国家社会に組み込まれたそれぞれの事象を、歴史的構造の中で捉えなおし、位置づけを行ったうえで、初めて比較という作業に臨んでいる点である。もちろん度々のべてきたように編者の意図は本書の中で解決させることではなく、問題点を明らかにする、いわば内在する視点の拡大にあったのかもしれない。

以上、評者の稚拙な感想を述べたが、その一貫した姿勢は民俗学だけにとどまらず隣接の諸分野にも影響を及ぼす本書の意義は大きい。今後広く「環中国海」を視野においた研究が推し進められることを期待するとともに、その可能性を探り続けることが求められるであろう。散漫な文章と評者の無力によって誤った理解をした点も多々あったように思われるが、御寛容を乞うとともに論者諸氏からの御教示を仰ぎたいと考える。

(A 5版 477頁 1989年7月31日 凱風社刊 5900円)

姚居順、孟慧英著

『新時期民間文学搜集出版史略』

志賀市子*

伝統文化の破壊をめざした中国の文化大革命は、民衆の生活に根付いた民間文学(周知の様に、中国でいうところの民間文学とは、主として伝説・民話・民謡・芸能等の口承文芸を指している。解放後、民間文学は民衆教育の手段として重視され、社会科学の一分野として認められずに衰退した民俗学にとってかわった。)に対しても一斉砲火を浴びせた。本書第一章では短いながら、文化大革命が全国各地で引き起こしたすさまじい破壊の一端が述べられている。文革以前に収集された貴重な資料や文物は、没収されて焼かれ、あるいはトラックに山積みになされて製紙工場に送られた。文化大革命の炎は民間文学についての貴重な資料を灰塵に帰しただけでなく、その担い手にも向けられた。民話の語り手や叙事詩、民謡の謡い手たちは、「牛鬼蛇神」や「毒草王」、「黒歌星(黒い歌手)」などのレッテルを貼られ、残酷な仕打ちから死んだ者も大勢出た。迫害を受けたという点では、民間文学の収集者、研究者もまた例外ではなかった。彼等の多くが、「黒線人物」、「反革命」などのレッテルを貼られ、非道な扱いを受けたという。

文化大革命終結後、すなわち1976年の「四人組失脚」以後、中国の民間文学は戦後の焼け跡から立ち直るように、徐々に復興を遂げ、新しい時代を築いていった。本書は1977年から1986年までの約10年間を、復興期(1977~1979)、建設期(1980~1983)、開拓期(1984~1986)の3時期に分け、それぞれの時期における民間文学の活発な展開を、主に理論・調査・出版の側面から詳述したものである。本論はまず、第1章、第2章、第3章にそれぞれ上述の3時期が当てられ、最後の第4章で『中国民間故事集成』の編纂、出版の過程を

※筑波大学大学院地域研究科